



赤谷の森から

～最近のトピックスをまとめてみました～

赤谷森林ふれあい推進センター

1. 赤谷の森自然散策（夏）

赤谷プロジェクトでは、春、夏、秋、冬の年4回にわたり「赤谷の森自然散策」を行っています。春は新型コロナウイルス感染症のまん延の影響で中止せざるを得ませんでした。夏は群馬県の警戒度も低かったことから、参加者を群馬県内在住の方に限定し、募集人数も以前の30人から20人に縮小して実施することとしました。7月1日に募集を開始しましたが、待ち望まれていた方が非常に多く、9時の受付開始から10分ほどで定員に達しました。

当日の7月31日は、午前には自然散策を実施し、午後は草木染め体験を行いました。散策は、ガイド役の赤谷プロジェクト地域協議会の長浜さんと石飛さんから動植物等の解説を聞きながら、溪流沿いのムタコ沢林道を歩きました。舗装されている林道のため歩きやすく、昆虫などに興味津々といった様子で散策を楽しんでいました。午後は、道の駅たくみの里にある“草木屋染の家”で、店主の山崎さんにご協力をいただき、赤谷の森で採ったクリの木の染料を使って、手ぬぐいの草木染めを行いました。染め方は、絞り染めと雪花絞りの2種類から選んで、各々がクリの染色液と鉄の媒染液を何度も往復させながら根気強く作業します。同じ手法でも人によって違った味わいがあり、どの作品もとても素敵に仕上がっていました！

次回は10月に三国街道の散策を予定しています。紅葉狩りと猿ヶ京の民話と紙芝居を堪能できますので、ご興味のある方は是非ご参加お待ちしております。



ムタコ沢林道散策での集合写真



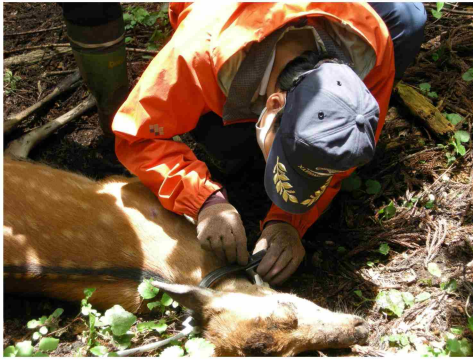
“草木屋 染の家”での草木染め体験

2. 低密度下におけるニホンジカの捕獲試験と行動把握調査

赤谷の森では、2008年から実施している哺乳類のモニタリング調査の結果、ここ10年間で、ニホンジカ（以下「シカ」）の大幅な増加が確認されています。現在はまだ低密度ですが、いずれ高密度となり、対策に大きなコストが掛かると予想されます。そこで、赤谷プロジェクトでは、低密度の段階で個体数を管理する試みとして、2018年から、くくりわなによる誘因捕獲試験（誘引には鉍塩を使用）を秋に実施し、成果を上げてきました。

今年は、これまでのシカの出現傾向から試験時期を6月とし、くくりわなに加えて箱わなでも捕獲を試みました。その結果、残念ながらくくりわなによる捕獲には至らなかったものの、箱わなでは1基20日間の稼働で成獣の雌1頭の捕獲に成功しました。この箱わなですが、2018年にも一度使用しましたが、その際はシカの警戒心が非常に強く、中に入ってくれませんでした。しかし、以降も箱わなを設置し続け、鉍塩による誘引を続けた結果、昨年ごろから中に頻繁に入っていることが確認されたため、今年は満を持して稼働させたところでした。加えて今年は、シカの季節移動を調査する目的で、箱わなで捕獲したシカにGPS発信器を装着して放獣しま

した。8月現在は、捕獲された地点からそれほど移動していませんが、秋以降は大きく移動する可能性があります。赤谷のシカの越冬場所はいったいどこであるのか、結果を楽しみにしながら、追跡調査を継続していきます。



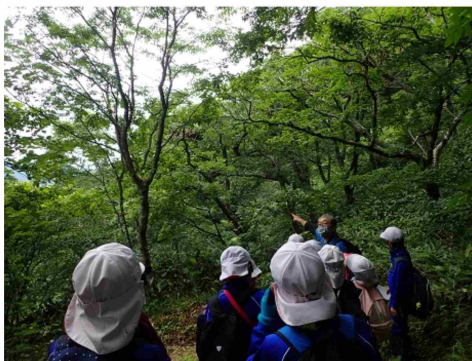
GPS発信器をシカに装着



GPS発信器を装着したシカの追跡調査

3. 新治小学校6年生の森林環境学習

新治小学校の6年生は、毎年総合的な学習の時間を利用して、赤谷の森の旧三国街道で自然体験活動を行っています。今年は7月16日（金）に行いました。この活動の目的は、児童たちに、郷土の自然である赤谷の森の実態や旧三国街道の歴史、人と森の関わりについて知ってもらうことです。赤谷森林ふれあい推進センター、地域協議会、日本自然保護協会が協力して、ガイドや旧三国街道の歴史解説等を行っています。新治小学校では5年生時にも小出俣林道を活用した自然体験活動を行っています。6年生時には街道の歴史について学ぶことに重点を置いています。児童約30人が3班に分かれて三坂線入口をスタートし、ガイドの説明を聞きながら、ゆっくりと約70分かけて東屋まで登り、そこから少し先にある田村家の墓付近で動物撮影用のセンサーカメラを設置しました。その後は東屋に戻り、お昼休憩。休憩後は、新潟県側に進んで、長岡藩士の墓と三国権現（御坂三社神社）の見学と説明を受け、新潟県側登山口へ下りて終了です。今回設置したセンサーカメラの画像データは後日回収し、事後学習に使用します。児童達は、事後学習の当日までどんな動物が写ってるのか知りませんので、結果を楽しみにしています。



ガイドの説明を聞く子供達



三国権現で記念撮影

4. 群馬県総合教育センター研修講座

赤谷森林ふれあい推進センターでは、要望に応じて研修等の受入れを行っています。8月3日（火）は、群馬県総合教育センターの依頼により、群馬県内の小・中学校、特別支援学校の教員7名を対象に研修を行いました。最初にパワーポイントを使い赤谷プロジェクトの概要について説明し、その後は車で「たくみの里」へ移動し、地域協議会の本多さんが運営に関わっている「森のおもちゃの家」を見学しました。昼食後は再び車で移動し、植生復元試験であるカラマツの漸伐試験地、シカ箱わな設置箇所、イヌワシの狩り場創出試験地へ案内し、それぞれの箇所で説明を行いました。最後は、「いきもの村」に移動し、閉会式を行いました。受講

者からは、「人工林を自然林にもどす取組は時間が掛かり大変だ」、「百聞は一見にしかず、貴重な体験を今後の授業に生かしたい」等の意見を聞くことができました。今回の研修は「自然観察や教材製作、施設見学などを通して、児童生徒に実体験を伴った環境学習を実践するための指導力の向上を図る」ことが目的でした。どこまで役に立ったかは分かりませんが、赤谷森林ふれあい推進センターとしては今後もこのような研修に協力していきます。



シカの箱わな設置箇所での説明



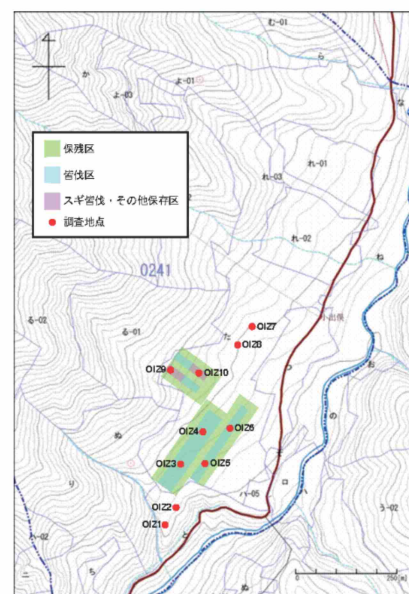
カツラの前で記念撮影

5. 最後にちょっとサイエンス！（赤谷プロジェクトモニタリング調査からの紹介）

赤谷プロジェクトでは、人工林を自然林に誘導することで生物多様性を復元することを目標の一つとしています。人工林から自然林へと誘導するための植生復元試験地が何か所かありますが、その内の小出俣試験地241た1林小班では、生物多様性の復元の調査の指標としてコウモリ類が有効かどうかの検証を進めています。コウモリ類は、哺乳類の中でも豊富な種数・個体数と広大な分布域を擁し、送粉者や昆虫の捕食者としての高い生態系機能や、環境変動に対する特異的な応答が指摘されています。海外では様々な空間スケールでの環境変化に対する指標生物としての注目が高まっていますが、コウモリ類が指標生物として扱われた例は日本国内ではまだ見られていません。群馬県みなかみ町では、これまでに「コウモリの会」有志グループによる調査で、11種のコウモリ類が捕獲されています。そのうち10種は赤谷プロジェクト・エリア内での生息が確認されており、指標生物として期待されています。調査方法は、7月から10月にかけて自動超音波録音装置によりコウモリの発する超音波を計測（10地点）することにより、コウモリの種類を特定し、そのコウモリの生息する特徴を持って森林の現況を分析するものです。これまでも平成24年、26年、29年に実施しており、今年で4回目となります。他ではあまり実施されていないことから、植生や生物多様性の復元状況の調査手法の一つとして今後注目していきたいところです。



立木に設置した自動超音波録音装置



調査位置図